

# 論文の和文概要

篠原 俊明

(博士論文の題目)

「体づくりの運動遊び」に関する指導資料の提案：教員の困り事を踏まえて

(博士論文の概要)

## 序章

本研究では、教員の体育指導に関する力量の違いから、体づくり運動系における内容構成ごとの指導に対する困り事やニーズといった教員の意識を明らかにするとともに、実際の「体づくりの運動遊び」の授業における課題を把握することとした。そして、それらの困り事や課題などに対応した、体育指導に関する力量が高くはない教員を支援する指導資料を作成するとともに、「体づくりの運動遊び」の授業実践から作成した指導資料の有用性について検討し、教員を支援する指導資料として提案することを目的とした。

## 第1章

第1章では、小学校低・中学年の体づくり運動系の「体ほぐしの運動（遊び）」と「多様な動きをつくる運動（遊び）」の指導に対する教員の意識を、教員の体育指導に関する力量の違いから検討とした。その結果、まず、双方の内容構成に共通して体育部に所属せず体育主任経験がないといった体育指導の力量が高くはない教員は、「単元に関する知識」、「単元計画の作成」、「1 単位時間の授業の流し方（組み立て方）」、「運動の師範」、「教具の不足」、「関連する副読本の不足」を困り事として認知し、「体ほぐしの運動（遊び）」における「児童の意欲の継続」と、「多様な動きをつくる運動（遊び）」における「効果的な場づくり」も困り事として認知していた。次に、使用する授業構想資料として、内容構成に関わらず、体育指導の力量が高くはない教員は、行政作成資料や官製および民間研究会が作成する資料や YouTube を使用しない傾向にあった。一方、副読本や体育に関する知識が豊富な先生への相談は、教員の体育指導に関する力量に関わらず、同程度使用していた。授業構想参考資料に求める内容については、いずれの項目においても有意差は認められず、全ての項目で教員の体育指導に関する力量に関わらずニーズが高かった。そして、「多様な動きをつくる運動（遊び）」で取り上げやすい動きとして、「体を移動する運動（遊び）」は、取り上げやすさに違いがなかったものの、それ以外では、体育指導に関する高い力量を有する教員に比して、体育指導の力量が高くはない教員が取り上げにくいと考える動きが多く確認された。

## 様式3号

### 第2章

第2章では、児童の学年や施設、同一単元計画の使用など授業の前提条件を統制したうえで、体育指導に関する力量が高い教員（熟練教員）と、体育部に所属せず体育主任経験がない体育指導に関する力量が高くはない教員（一般教員）を対象に、「体づくりの運動遊び 多様な動きをつくる運動遊び」の授業を比較することを目的とした。具体的には体育授業場面、身体活動量、フープ回しの習得状況を比較した。その結果、熟練体育教員と一般教員の運動学習場面の時間には有意差が認められず、熟練体育教員の学習指導場面の時間および出現頻度が一般教員と比して多く、マネジメント場面については、時間と出現頻度とともに一般教員が有意に高値を示したことから、一般教員に対して学習指導場面の確保やマネジメント場面を減少させる方略を提示するなど支援することの必要性が示唆された。また、身体活動量については、一般教員のSBが有意に高く、MVPAは熟練体育教員が有意に高かったことから、熟練体育教員の方が身体活動量を確保していたと考えられ、身体活動量の増進の観点から、一般教員を支援する必要性が示唆された。単元後のフープ回しの習得状況について比較したところ、男子において熟練体育教員クラスは、一般教員よりも習得が進展していた。したがって、一般教員クラスのフープ回しの習得について支援の必要性が考えられた。

### 第3章

第1章と第2章の結果をもとに、第3章では、体育指導に関する力量が高くはない教員（介入教員）を支援する指導資料を作成し、作成した指導資料を用いて介入教員が実施した「体づくりの運動遊び 多様な動きをつくる運動遊び」の授業について、第2章の熟練体育教員の授業における体育授業場面、身体活動量、フープ回しの習得状況との比較を行い、作成した指導資料の有用性について検討した。その結果、熟練体育教員と介入教員のマネジメント場面の時間には有意差が認められず、学習指導場面の時間は介入教員の方が長く効果量は大を示し、MVPAは介入教員が高値を示した。一方、フープ回しの習得状況については、性に関わらず、熟練体育教員クラスの児童の方が単元後の習得が進んでいた。

以上のことから、作成した指導資料は、学習指導場面の確保とマネジメント場面の時間の減少、MVPAの確保に寄与する可能性があるものの、フープ回しの習得という学習成果の観点に関しては十分とはいえず、指導資料の課題が明らかとなった。

### 結章

以上3つの研究課題における研究知見を踏まえ、教員の特性ごとの実感・実態に応じた「体づくりの運動遊び」の授業実践を支援する指導資料は、体育に関する力量が高くはない教員の授業を、より良い体づくり運動系の授業とする方途のひとつと考えられる。一方で、フープ回しの習得といった学習成果については、課題が残り、再考する必要がある。